

国木田独歩作品における女性

——『酒中日記』を中心に——

鈴木 志 乃

はじめに

日本の小説の特徴は、音に対する豊かな感受性と、悲哀、孤独、絶望といったマイナス要素に重点が置かれ表現されることにある。明治時代に文豪とよばれ、三十七歳で亡くなった国木田独歩は、初の小説『源叔父』から晩年の『竹の木戸』『二老人』に至るまでの作品で、悲哀の感情や暗さを重く描いている。おそらく独歩の作品が多くの人に読まれてきた要因であろう。今回私が取り上げる『酒中日記』は独歩の代表作であると同時に、その要素がふんだんに盛り込まれている作品である。

独歩は『病床録』^①の中で、「女は禽獣なり、人間の真似をして活く」と「女性禽獣論」を唱えている。『欺かざるの記』では、「女性の品性の下劣野陋なる、人心の険悪なる、常に年若き者の悲劇をなすを知る。(略)『薄弱よ、爾の名は女なり』女性の品性に誠実を欠くは薄弱なるが故なり。吾未だ高尚なる女を見ず。女子は下劣なるものなり」「婦人は実に下劣なる者なり」「女は醜にして偽に非ざるか」と「女は……、婦人は……」といった普遍的な用語を使い、女性を捉え始めた。『酒中日記』では、「母」と「息子」、「嫁」と「夫」という図によつて、ある一人の男の「不幸」を描き出している。男・大河今蔵を絶望へと押しやる「女」を、どのように捉えるべきか。先ず独歩の女性観を考えていかなくってはならない。

独歩の唱える「女性禽獣論」、この問題を戸松泉は「佐々城」信子の側からの一方的な決別（カッコ内引用者）に

あるとしている。また、坂本浩も「国木田独歩」の中で、

信子に「不幸なる精神的不具を明識せしめ」て、彼女を善導しようと考えていた独歩は、この作（『鎌倉婦人』）に於いても鎌倉婦人に忠告しようとする気持が一寸動いたが、くるりと背を向けてしまっている。小説自体としては不完全な作品である。これが独歩が晩年に語った「病床録」の女性観へ進展していったのである。「女は禽獣なり、人間の真似をして活く」これが有名な女性禽獣論として天下に知れわたるものである。^③

と、信子との別離が「禽獣論」に発展していったと述べられている。

一方、母・まんに対しての憎しみといった感情が原因であるとする指摘したのは、勝本清一郎である。

（独歩は）父親のほうに固着して、母親のほうに憎しみや敵意を持つほうのタイプですね。それが独歩の作品全部を貫いています。おっかさんがなんだかわけのわからない男といっしょになって自分を生んで、また国木田家にちゃんとした士族の家柄にきたというので、おっかさんに対しての憎しみのほうになる。そこで女つて者は、けつきよくあてにならないという思考が形成されてゆく。「女は禽獣の一種なれども」という書翰文が没後に発表されているんですね。^④

母蔑視から女性軽視へとの流れがあると主張している。

しかし小野末男^⑤は勝本清一郎の論はありえないとして、この問題に対して坂本氏の論に同意。しかし信子だけではなくその母佐々城豊寿もまた独歩によって意識されていたと考えている。

小野は、『欺かざるの記』（一八九六年八月十八日）を挙げ、

彼の母に比ぶれば吾が母の心情のうるはしさよ。吾母は偽といふことを知り給はず、吾が母の情には誠実同情の気あふるゝが如し。吾が母には教育なきが故に理想てふものゝ影だけになき故、志念は低き様なれども天性上品の人に在せば母を知る人の母になづかぬは稀なり。吾が心に彼の母あさましく思ふ念みちあふるゝ也。

と、母・まんの性格がいかに素晴らしいかを語り、まんと比較する形で「彼の母」として佐々城豊寿を指している。彼の女の母はげに世にも卑しき性の女なること益々我には明らかに成りまさりゆく。彼の女も此の母の性を少し

は受けつぎたればにや、情の中に誠少なし。腹に墨あり。眼に手段あり。意地強し。これは正しき判断なり。彼の女の行末の不幸を予言し得るなり。

小野末男はこの『欺かざるの記』の文から、独歩が「信子との恋愛に陥った時からすでに豊寿に対して好意を持っていなかった。」⁶⁾としている。また、『欺かざるの記』(二八九五年十月八日)の日記からは、「彼の女は誤解、不情、頑固、虚栄より出づる決心を以て吾等に当たる(略)豊寿氏に対する遺恨憤怒復讐的悪寒」、同年十一月十一日からは「豊寿夫人は無類の剛性者なる故にこれを最後まで争う時は非常のことを起こすに至る」、信子との離婚を認めたとの一八九六年五月四日の日記からは「彼の女の母は一個の高慢にして、無学虚栄を好み、人間を知らず、神を知らざる政治家たるのみ」と、豊寿夫人に対し独歩が敵意を抱き、憤りを感じていることが示されている、としている。

大串幸子は「女性禽獸論」に関してまた別の角度からこの問題を捉えている。

独歩は実生活の中で「女子禽獸論」という極端な女性蔑視の言葉有機會のある毎に連発していたという。この事実は、それほどまでに女性を罵らずにはいられないほど内面的に傷つきながら、なおも嫌うべき女性関係をくり返していた当時の独歩の現実体験の逆反映であつたと思うのである。独歩の女性体験は、信子事件やここに述べたような特定の秘密の女性との関係だけではなかつた。(略)生涯ついに妻妾同居という不自然な関係を、断切ることが出来なかつたのだ。このような事実を知る時、独歩の女子禽獸論は、彼の女嫌いを意味するものではなく、むしろ女好きの彼が自らの女性に対する弱さを自覚したことによる自戒の意味が含まれていたと思う。

として、「独歩にとつての女子禽獸論は、女避けを欲しつつ女と関わつた彼の苦しまぎれの自己弁護の証し」であつたと述べている。

独歩の「女性禽獸論」には、佐々城信子・豊寿の親子に対するものがあつたのは、確かであろう。母まんに対しては敬愛の念を持っていて、父専八とともに両親に対し独歩が情愛を感じているように思われる。私が思うに、大串氏の「自己弁護」論がどれよりも、独歩の「女性禽獸論」の精神に近いのではないだろうか。独歩の作品では、哀れとしか言ひようの無い女たちがよく登場する。それは『竹の木戸』の光源、『運命論者』の里子、『春の鳥』の六歳の母、『酒

中日記』のお政などである。「女性禽獸論」を唱える独歩がなぜそのような哀れな女を描くのか。それは独歩が女性という生き物がある意味でいとおしんでいるからではないか。

『酒中日記』は、主人公大河今蔵の悲哀と絶望そして諦念を日記という形式で語るることによって過去の出来事を表象している。絶望の原因となった「母」と、それに押し潰れた「妻」を中心に、独歩が持つ女性像を考察し論じていきたい。

1

『酒中日記』は、元東京の公立小学校の校長であつた大河今蔵が、瀬戸内の小島（馬島）で、私塾の教員となり、酒を飲みながら震える手で五年前の出来事を日記に書くところからはじまる。二十七歳であつた今蔵は、日清戦争が始まつた頃、軍人に熱狂した母と妹が開いた素人下宿の「娼酒の料」を求められ、己の苦しい生活の中でもそれに応じていた。明治二十五年十月二十四日土曜日の夜、母からの手紙で五円の要求があり、次の日（二十五日）に今蔵の妻・お政は急ごしらえにたつた一本の帯を質屋に出し三円を作つた。今蔵は小学校の改築計画の事務を引き受けており、升屋の老人から寄附金百円を預かり、机の抽斗ひきだしへとしまつた。午後金を取りにきた母は三円しか用意できなかったことに納得せず、怒りを露にしていたが息子の抽斗に金（寄附金）を発見したので、それを盗み帰つていった。母親と入れ違いに家を出た今蔵が帰ると寄付金が無くなつていることに気付き、母の元へ出向いたが、酔つて軍人と騒ぐ妹と悪態をつく母にけんもほろろに追い返されてしまう。

その帰り道で手提げ鞆を拾い、中に三百円が入つていたため思わずその百円を懐中してしまふ。その一カ月後隠しておいた鞆をお政が発見し、夫である今蔵の罪を知つてしまふ。帰つてきた今蔵は妻に罪が発覚したことに狼狽し家を出るが、お政はその隙に二歳になつた息子・助たすくを負ぶつて井戸に身を投げ、自殺した。今蔵は妻の葬式後小学校を辞職し、その際に貰つた慰勞金三百円のうち百円を拾つた鞆に戻し、秘かに持ち主に返した。身の回りを整理し、東京を離れ、「大阪おほさかに、岡山おかやまに、広島ひろしまに、西へ西へと流れて遂つひに」、馬島に「漂着ひょうちやく」したのである。その五年後、酒の力で気を強

くしながら往時を顧みて、後悔していること、また島の少女・お露や老人達に愛され可愛がられていることを「酒中日記」と名付けた日記に記している。

明治三十年五月十九日土曜日で終わっている日記は、翌日今歳が舟遊び中に水死したことを表している。今歳死後、お露は今歳の子を産んだ。

子と先立ったお政と、子と共に残されたお露とどちらが不幸か、日記を借り受けた「記者」が考えている所で、この作品は終わっている。

『酒中日記』は、明治三〇年五月三日木曜日からはじまり、五月十九日土曜日までの出来事を日記形式で書かれた作品である。その題の通り、酒を飲みながら酒の力を借り、酩酊状態で、現在と「悲惨」な過去を振り返り綴ったもので、日記を書いている現在よりも、窃盗という罪を犯し、更なる悲劇へ妻を追い遣った過去に比重を置き、その経緯を記録している。

日記という記述のものは、①、読者を想定していない（よって、本音の吐露も考えられる）。②、日付をつけること。③、出来事を想起すること。④、新たに文を書き記すことが出来ること。⑤、全体的なテーマというものが無く、不連続性・思考の断片であることが挙げられる。しかし反対に、思考の進展・展開という視点からでは連続性があるともいえる、非常に複雑な構造を持っている。上記の項目を今歳が書く『酒中日記』と比較させたら、二・三・四・五が当てはまると言えるだろう。この「日記」の連続性は、ある一時期の過去を思い出し記す、という点において、連続していると言える。

『酒中日記』では、文末で日記形式から記者の文語体へ移行し、雑誌上で日記が公表されるに至った経緯をそこで初めて述べる、という具合となっている。更に読者がこの作品をどう読むべきかを指南する役割もある。独歩の『酒中日記』は明治三十五年一月十五日発行の『文芸界』に掲載され、その後『運命』に収められた。雑誌によって発表され、文末で「記者」が作品の締めを語るこの設定は、あたかも実際の日記が存し、雑誌の紙面に載せられたようなリアリティを持たせることに成功している。しかし、独歩が『酒中日記』で表現したいことは、先に逝くものと残されるもの

のどちらが不幸かを読者に投げかけることだけなのだろうか。『酒中日記』を読むに当たり、日記に書かれていないことも留意しつつ、認識を深めていかななくてはならない。

先ず、主人公である大河今蔵について考えていく。今蔵は、「日記」の中に存在する二十七歳の頃を、「あの頃の自分は眞面目なもので、酒は飲めても飲まぬように、謹厳正直、いやはや四角張った男であつた」としている。そしてその実直さこそが人々（特に升屋の老人）を惹きつけたのである。「温和で正直だけが取柄」で、自分の性質の特色を「人なつこひところ」であつたとする今蔵が十月二十五日以降、その性質を失つたとして、「温和な人なつこひところは殆ど消え失せ、自分の性質の裏ともいふべき妙にひねくれた片意地の處ばかり潮の退た後の岩のやうに、ごつ／＼と現はれ残つた」のは、母の裏切りと、窃盗という形で自分を自分で追い込んだことにある。そして妻を信じきれず、更に自殺を止められなかつたことが現在の今蔵の弱さと墮落の発端となつた。

気弱な性質は五年たつた後も保持し続けた。「酒を飲んで（日記を）書くと、少々手がふるへて困る、然し酒を呑まないで書くと心がふるへるかも知れない。『あゝ氣の弱い男！』（カッコ内引用者）と自分を卑下している。しかし、馬島でも今蔵自身が失つたとする「人なつこひところ」を有していた。特に今蔵を面倒見てくれる六兵衛やお露の存在がそれを証明する。更に日記に登場する「若い者三四人」「若者」「同勢四五人」は、この島の人が今蔵をどう受け入れているかを考える材料となる。人口百二十三人であることを考えれば、非常に友好的に今蔵と接しているのだから。今蔵の「自分の周囲には何處かに悲惨の影が取巻て居て、人の憐愍を自然に惹くのかも知れない」という言葉は六兵衛の「先生のやうな人は誰でも可愛がりますぞ。」「一口に言ふと先生は苦勞人だ。それで居て面白い處があつて優しいところがあるだ。先生と斯う飲んで居ると私でも四十年も前の情話でも爲て見たくなる、先生なら黙つて聴いて呉れさうに思はれるだ。島中先生を好んものは有りましねえで。お露や私を初め。」という言葉から今蔵の時折見せるナイーブな面が人々を惹き付けて止まないようである。

作中には対照的な三人の女性が登場する。今蔵の母と、妻・お政、馬島のお露である。特にお政とお露は、今蔵と関係を持ったため比較のような形で語らされる場面がいくつ也存在した。「可愛いお露に比べるとお政など何でもない」、

「死んだ妻はお露ほど可愛く無かったよ、何でも無かったよ」、「お露は可愛い。お政は気の毒。」といっている。しかし、お露を「可愛い可愛い」といいながらも最後に名を呼び求めたのはお政だった。お露は島の若者が秘かに争うほど、島の人々から愛されていた存在であった。一方お政は病弱で世間体を気にして身体を縮こめているような、気弱な人間であった。その上、夫の家族は当てにならず、周囲に自分の味方を作ることが難しく病弱な息子もいた。その分お政は今蔵にとつて、守らなくてはならない存在であったのではないだろうか。その守ってやらなくてはならなかった存在を守れなかったことを、今蔵はずっと悔やんでいたのだ。自らの過ちによって壊れてしまったその幸せを、心のどこかでいつも求めていたのかもしれない。

また、母の存在も今蔵にとつて非常に大きなものである。日清戦争の時代、軍人が持て囃されていた。母にとつて今蔵は真面目なだけのつまらない存在で、たやすく否定できる存在である。今蔵にとつての母は、怒っていても母に対する情を捨てられず、下手に出てまた裏切られることを繰り返す。しかし、母を愛おしく思う気持ち、母から自分を愛してほしい気持ちがあることは否定できない。

今蔵は「酒中日記」について、「厭になつて了つた。書きたくない。」と言いながら、過去に出来事を酒の力を借りてまで日記に記している。飲酒とは、気持ちを高揚させ、あるいは感傷的にしてくれるものである。「酔へば楽しいこの酒」で、そこまでして苦痛をあじわう行為に何の意味があるのだろうか。苦痛を味わうことで過去を忘れようとする己に対し、罰を与えている、と考えることも出来る。あるいは、書き残すことで懺悔の気持ちを表しているのかもしれない。しかし私は、今蔵の「酒中日記」は、彼の遺書ではないかと考えた。

馬島での生活を日記から読み取るに、今蔵の受けた傷は段々と癒え始めてきたように見受けられる。それは所々に出てくる「あゝ今は気楽である」や「自分のやうな男を、兎も角も呑気に過さしてくれるかと思ふと、正にこれ夢物語の一章一節と言ひたくなる。」「さても気楽な教員」「あゝ気楽だ。母もいらぬ、妹のいらぬ、妻子もいらぬ。慾もなければ得もない。それで居てお露が無闇に可愛の不思議じゃないか。」という言葉から、母の裏切りや窃盗という罪を犯した後に今蔵の心に築き上げられたしこりが薄れてきているように思われる。しかし至る所に過去を引きずる弱さが

感じられる。「自分は縁先に出て月を眺め、朧ろに霞んで湖水のやうな海を見おろしながら、お露の酌で飲んで居ると、ふと死んだ妻子のこと、東京の母や妹のことを思ひだし、又此身の流轉を思うて、我知らず涙を落すと、お露は見て居たが、其鈴のやうな眼に涙を一ぱい含くませた。(略)さても可愛い此娘、此大河なる団栗眼の猿のやうな顔をして居る男にも何處か異な處が有るかして、朝夕慕ひ寄り、乙女心の限りを蓋して親切にして呉れる不^ふ便^{びん}さ」。ふとした瞬間に思い出される妻子とそれに付随する過去が、やはり今蔵から現在も離れられない。自分を可愛がるお露を哀れむ今蔵の姿は、人との関わりを受身で行い、人との距離に溝を感じている。

五月十一日の日記は、回顧から離れた今蔵本人の人生観が語られている。人を愛し、愛されたい気持ち強く持っているが、今蔵は周りにどんなに人がいても孤独から逃れられない。それは今蔵の感情吐露を見ても明らかだ。怒る、涙を流す、叫ぶ、そういつた感情を表すことを過去の出来事と関係なしには行えない。所謂「乖離」の状態に陥っている。また、「死」への思いが散りばめられていることは見逃せない。「(お露が)可愛いから可愛いので、お露とならば何時でも死ねる」(カッコ内引用者)、「此島に生れて此島に死し、死しては彼の、そら今風が鳴つて居る山陰の静かな墓場に眠る人々の仲間入りして、此島の土となりたばかり」と思う今蔵は、最終的に妻の名前を呼びながら、死んでいった。それは意識しないまでも、自殺の願望があったからではないだろうか。馬島に着くまで「この方幾度自殺しやうと思つたか知れない」と過去形で語る今蔵が哀れでならない。

「酒中日記」の主題は、母親によつて日常から非日常に叩き落とされ、道徳や制度などの人間生活からも、気付かぬうちに「乖離」し、孤独を背負つたまま日記を残し死んでいった男の鮮明な人物描写にある。

2

明治に入り、「戸籍法」が制定された(一八七一年)。明治政府は中央集権体制の確立をはかるため、家族を四民平等政策のもとで捉え規制しようとしたのである。この法律により、「家」は統治機構の最小単位として扱われ、家父長は

戸主となり「家」の中の力を握るものとなった。その中で弱者である女性の「母親」はどのように見られていたのだろうか。「母親」像から考えていきたい。尚、これを考えるにあたって、二葉亭四迷の『浮雲』、『国民之友』に発表された森鷗外の『舞姫』を使用する。

『酒中日記』論で、金美脚は、

日本近代文学に現われる（母）のイメージは、父不在の家庭でもつばら息子の出世を祈る東洋的な美德の象徴として印象づけられている。⁽⁸⁾

としている。また、三田英彬は、二葉亭四迷の『浮雲』、森鷗外『舞姫』を挙げ、（母）のイメージについて、

父亡きあと、立身して家名を再興せよ、それが母のためでもあるという、「家のテーゼ」に育てられたこともたしかであった、「母」は「家」として機能し、そこには息子が出世するまでは、じつと耐えしのんでいる母のイメージが浮かんでくる。

「母」こそは、息子を「近代」へと出発させ、とり残されつつも、そこに耐えることによつて紐帯をつないでいる。とし、

「子」にとつても「母」は、近代への船出の動機でもあり、支えでもあり、共に暮らすべき目標でもあつて、逆にそこに束縛を感じようとも、「母」を切り離れた自立などは到底考えられなかつたのだ。⁽⁹⁾と述べている。

では実際に、二葉亭四迷『浮雲』と森鷗外『舞姫』を見ていきたい。

まず、『浮雲』では、主人公・内海文三は父の亡き後、東京に住む叔父（父の実弟）の家に引き取られる。叔父の庇護のもと勉学に励み、卒業後役所での仕事を手に入れるが、役所から解雇を言い渡されてしまうのであつた。力を持つ上司に懇願すれば復帰することも出来るが、文三は自尊心から毛嫌いしている上司に頭を下げることは出来ないと考え。叔母（お政）や同僚の本田が上司に頼むことを勧めるが、文三はその言葉に耳を貸そうとしない。やがて、叔母は仕事もしないで家にいる文三を煙たがるようになり、味方になってくれるのは叔母夫婦の娘・お勢ただひとり。お勢と

の結婚を約束されていたが、その約束さえ怪しくなっていく。そんな中、お勢と本田が菊人形を見に行く時、文三は菊観を断り一人家で留守番をすることになった。ところが、文三はお勢と本田と一緒にいることが気になつて仕方がない。お勢たちが帰つてきた後、叔母とお勢が調子者だが愛想がよく、話が面白い本田に一目置くようになる。特に叔母は、文三と違い役所で上司と上手くやり、仕事も順調にいつていることを評価していた。本田が頻繁に家やつてくるようになる、文三は本田とお勢が楽しく会話をしている姿を見聞きして、嫉妬を募らせていく。文三が大人気なくお勢に八つ当たりするようになる、今まで多めに見てきたお勢さえも、文三を見捨てて頼りがいのある本田に興味を示すようになるのであつた。

お勢に対して、見目麗しい容貌と、親の過保護によつて授けられた教育による知識の多さだけに目が行つていた文三だつたが、実際のお勢という女性が、自分が思つていた女性と異なつてことに気付く。淡い恋心を捨てきれず、自尊心を抑えながら、叔母やお勢の嫌味を我慢していたが、文三は最後の決断を下す。お勢に告白し、本心を尋ねて、もし自分のことが嫌いになつてしまつたのであつたら、叔父の家を出て行く決心をするのであつた。

二葉亭四迷の『浮雲』はこのような流れの話になつている。金氏、三田氏の述べる通り、『浮雲』は、父不在の母子家庭の息子が主人公となつている。

次に『舞姫』だが、十九世紀末ドイツ留学中の官吏、太田豊太郎が主人公である。ドイツの下宿に帰る途中、クロステル通りの協会の前で涙を流す美少女・エリスと出会い、心を奪われる。エリスの父の葬儀代を工面してやり、以後清純な交際を続けるが、仲間の讒言から職を失うこととなつてしまう。

その後エリスと同棲を始め、生活費を工面するため新聞社のドイツ駐在通信員という職を得る。エリスはやがて豊太郎の子を身籠つた。豊太郎は友人・相沢兼吉の紹介で、大臣のロシア訪問に随行し、信頼を得る。そのことで復職のめども立ち、また相沢の忠告もあり日本への帰国を決めたが、豊太郎の帰国を心配するエリスに告げられず、その心労で人事不省に陥つた。豊太郎が意識を失っている間に、相沢から事態を告げられたエリスは、衝撃の余りパラノイアを発病し倒れてしまった。治癒の望みがないと告げられたエリスに対し後髪を引かれつつ、エリスとお腹の子を残し、豊

太郎は日本に帰国する。豊太郎は相沢に対し、このような良い友はなかなか得られないが、しかし私の脳裏に彼を恨む気持ちがある。今日までずっと残っているのである、と述懐する。

『舞姫』の作品はこのように終わる。では、この二作品から明治文学の「母親」を見ていく。

『浮雲』では、父が十四の頃亡くなったときの描写から、母が登場する。

（父は）遂に文三の事を言ひ死に果敢なく成て仕舞ふ、生残つた妻子の愁傷は実に比喩を取るに言葉もなくばかり、「嗟矣幾程嘆いても仕方がない」トいふ口の下からツイ袖に置くのは泪の露、漸くの事で空しき骸を菩提所へ送りて茶毘一片の烟と立上らせて仕舞うふ、（略）家計は一方ならぬ困難。葉礼と葬式の雑用とに多くもない貯蔵をゲツソリ遣ひ減らして今は残り少なくなる、デモ母親は男勝りの気丈者。貧苦にめげない煮焚の業の片手間に一枚三厘の襦袢を縫けて、身を粉にして拵了ぐに追付く貧乏も如何か斯うか湯なり粥なりを啜つて公債の利の細い烟を立てゝある、

と母の持つ性質について触れ、

（某省の准判任御用係となつた後）国許の老母へは月々仕送をすれば母親も悦び叔父へは月賦で借金済しをすれば叔母も機嫌を直す。

と、遠く離れた場所に居る母の姿に触れている。この話は文三の視点から書かれているため、母に対する描写も少ない。しかし、夫が亡くなった後、子供を養いながら暮らしていくために内職をし、子供の立身・出世を一番に考え、文三を支える存在であることは見て取れる。

『舞姫』でも主人公の視点から過去を綴る形で作品が書かれている。そのためこの作品でも「母親」に関する描写が少ない。

父をば早く喪ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出で、予備疊に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名譽

なりと人にも言はれ、某省^{なにかし}に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ることを三とせばかり、官長の覚え殊^{こと}なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞともふ心の勇み立ちて、五十を踰^こえし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遙々^{はるか}と家を離れてベルリンの都に來ぬ。
(中略)

余は私に思ふやう、我母は余を活きたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。とあることから、『舞姫』豊太郎の母もまた『浮雲』文三の母と同様、息子の立身・出世を望み、そのことによつて日々の苦しい生活を慰めていたのである。

この二作品の主人公の共通点は、省庁に勤めた経験を持つことである。省庁などは帝国大学卒業者か、不足であつた場合帝国大学出身者以外の試験選抜者が就く職業であり、所謂エリートと呼ばれる人々で、比較的恵まれている立場にあるといつてよい。

この二作品から受ける「母親」像は、克己、意志、忍耐、謹慎といつた資質を持ち合わせた神聖な存在である、というものである。これはそれぞれの作品の作者がもつ理想的な「母親」像を表していると思われる。なぜこのような理想的な「母親像」を描き出されていったのか。

それは明治という時代、女性の「個」が軽んじられ、その生き方が常に抑制されてきたことに起因する。一般社会に「劣つた性」と見られていた女性が「女性解放」や「男女同権」といつた啓蒙活動などの時代背景を受け、その抑制の解放口を見つけ出したことによる。そのことから伝統的な旧式とは異なる、「家のためではなく、あなたのためとなるために結婚する」という新しい結婚観、夫婦観、家庭観をもつた女性が増えていつた。『浮雲』『舞姫』の中に登場する母たちは、それらとは異なる旧來の、女性が押さえつけられていた生き方を、男性の視点で描いたものであるといつてよいだろう。『浮雲』『舞姫』の、「犠牲、献身、忍耐」という性質を身につけた「母親」あるいは「妻」という存在は、父が不在の家庭（支配者のいない家庭）だからこそより一層「理想」であり、「見本」であるように描がかれたのである。

『酒中日記』における姑（今蔵の母）と嫁の関係は、明らかに「確執」と呼べるものであった。しかし、その事実はこの作品を一読しただけでは、問題として意識されない。それは、母の醜悪ともいえる言動と今蔵の情けない態度によつて、親子の問題が嫁姑の問題よりも大きく感じられるからである。

第一節で、明治の文学が登場する「母親」は、克己、意志、忍耐、謹慎といった資質を備えた理想的な存在であることを既に述べた。明治に入り、儒教の教えである「孝」や「悌」が重視され、女性は特に「孝」を求められたのである。「孝」は徳目の一つで、親によく服従することを示すもので、夫の家族に対する「孝」もまた同様である。この時代、女や妻の「個」の価値観が男性に比べ、格段に軽んじられていた一方、家の秩序に重きが置かれていた。「報い」を求めず、自己を犠牲に献身する女性が男性の「理想」であつた時代に、今蔵の母はなぜ登場したのであるうか。まず今蔵の母について考える。

笹淵友一は、「この作品の今一つの特徴は女性に対する冷酷な観察である。母妹共に冷酷なエゴイストであるばかりでなく淫蕩そのものとして描き出されている。これは明らかに独歩の女子禽獸論に関する構想である」と、女子禽獸論との関りを指摘し、滝藤満義は、「信子体験以来の独歩の女性不信の深淵を思い知らされる。（略）母親は平和破壊の元凶であればこそ毒々しく描かれねばならぬのが独歩の小説作法である。」と悪役としての母について述べている。また、金氏は、「酒中日記」には、女性に対する強烈な憎悪の心情が、母親に仮託された形で現れる。」と独歩の女性観に対する指摘をしている。

ところで先述したような母・まん、佐々城豊寿、信子母子がこの今蔵の母誕生に携わっているのであるうか。

『酒中日記』では、今蔵の母が軍人に傾倒している様子が描写されている。独歩が『国民新聞』の海軍従軍記者として日清戦争に参加していたのは有名な事実である。巡洋艦・千代田に搭乗し、戦争の記録を日本に通信する立場にあつ

た。このときの記事は好評を博し、後『愛弟通信』という名で刊行されている。独歩は『欺かざるの記』に記事には書けない戦争に対する心情を吐露していた。一方で友人の田村江東（本名・三治）へ宛てた手紙¹²には軍人に対する失望が語られている。

艦内にてはストーブの前で日々世々馬鹿話許り致し居候、某某將軍達の情話も已にききあき申候。土官次室の諸君とは日々夜々ほらの吹きくらべ致し居候。但し、精神上の事を語りてもわかる御方更らになし。宗教は愚民の道具、だ位が関の山に御座候。故にストーブの前、幽懷を談ずなどの風流事は、夢にも出来難く候。『軍人とは一種の愚人なり』とは小生発明の秘密名言に御座候。

独歩の戦争意識は包括的に捉えるべきであるが、『酒中日記』には軍人崇拜の社会風潮に対する批判が込められていると見てよいだろう。今歳の母妹は文人崇拜の精神を持ち合わせ、それはこの二人に限らず社会一般で認識されている精神的構造であった。

処が日清戦争、連戦連勝、軍隊万歳、軍人でなければ夜も日も明けぬお目出度いこと々々となつて、そして自分の母と妹が墮落した。（略）日清戦争となつて、兵隊が下宿する。初は一人の下士。これが導火線、類を以て集り、終には酒、歌、軍歌、日本帝國万々歳！そして母と妹との墮落。

『國家の干城たる軍人』が悪いのか、母と妹とが悪いのか、今更いふべき問題でもないが、たゞ一の動かすべからざる事實あり曰く、娘を持ちし親々は、それが華族でも、富豪^{ふうごう}でも、官吏でも、商人でも、皆な悉く軍人を尊に持ちたいといふ熱望を以て居たのである。

今歳が「母親」に求めているのは、明治文学に表れるような「理想的な母」である。大河家に悲劇をもたらす「母親」が、「父親」という家族の支配者の不在によつて作り出されている、と考えたのではないだろうか。それは『酒中日記』で盗られたお金を取り戻しに行く際に父親の写真を持つていく所からも分かる。

『直ぐ行つて来る。親を盗賊に爲^することは出来ない。お前心配しないで待てお居で、是非取りかへして来るから。』と自分は大急ぎで仕度し、手箱から亡父^{ちち}の写真を取り出して懐中した。

そして、母に百圓について問い質すも、取り付く島もない場面では、「自分は形無し。又も文句に塞^{つま}つたが、氣を引きたてゝ父の写真を母の前に置きながら」とあつて、さらに『父上^{おとう}さんをお伴れ申してのお願で御座います。母上^{おつか}さん、何卒^{どうか}……お返しを願ひます、それでない^{わたくし}と私が……』というように母親に父の写真を見せることで改心を迫つた。

この場面から今蔵の「父親」という上位者によつて、母を何とか「理想」へ近づけようとしている。しかし、母親にとつては今蔵の父は既に過去の存在であり、貞淑といった觀念もまた、今蔵の父とともに消え去つてしまつたのである。母の今蔵に対する非道な振舞いは、自墮落者の標本であるといえる。明治の文学から見えた息子の立身・出世のために自分を犠牲にして献身し、息子の後ろで祈り続ける母親と、今蔵の母は落差がある。子どもから百圓を盗み、親子の關係を容易く切ろうとする非情な母親は、しかし、明治文学の中の母親の一方の姿なのではないだろうか。中島健蔵は、日清戦争から日露戦争にかけては、「立身出世」の時代であつた。封建的な士農工商の身分關係がくずれ、藩閥の勢力はさかんであつたが、やがてそれらが新たに官僚、軍閥、財閥という形で近代的に再組織されようとしていた時代であつた。立身、出世は、公然と認められた世俗的な道德基準であつたし、「えらい人」になれるというところが、教育の方針であつた。¹³⁾

と述べている。つまり、『浮雲』『舞姫』の主人公たちの成功が問われる時期がちようど『酒中日記』の背景となつてくるのだ。独歩もまた若くして上京し、立身出世を目指した若者の一人である。しかしその後、立身出世とは無縁の人生を歩み、作品にも立身出世とは無縁の人々が多く登場している。『酒中日記』の大河今蔵もまた小市民の一人であり、「温和で正直だけが取柄」な息子は、母親の期待に応じられない素質をすでに内包していたのはあきらかである。金氏は、

「学校の先生なんテ、私は大嫌いサ」という学校の先生を忌み嫌う母親のせりふからは、「立身出世」から乗り遅れた息子に失望した、母親の恨みを読み取ることも可能である。まして時代の風潮に遅れまいとし、世俗的な道德律を信奉している母親にとっては、息子の無能は耐えられぬものであつたはずである。

と母親の心情について触れている。また、

息子から報われぬ望を外部に求めていく母親と息子の志向する人生の目標の差は大きい。として、今蔵の母は、

息子の立身出世を望んでいる「浮雲」・「舞姫」の母親たちが、その望が叶わぬ時に成り得る未来像である、といえるのではないか。それを独歩は母親と大河の対照的な性格描写、人物像を通じて見事に捉えながら、しかし、示唆を投げ掛けているに止まっているのが実情である。と結論付けている。

今蔵の母が現在の風潮に遅れまいとする姿は、軍人に傾倒していく姿や素人下宿を行うところからも見えていた。息子に期待が出来ず、その望みを外に向けるしかないのだとしたら、哀れな存在であったといえるのではないか。この話は、母による窃盗、今蔵による横領、『酒中日記』は「お金」を軸に行われる。なぜ母は、今蔵の家から百圓を盗んでいったのか。なぜ返さなかつたのか。母が度々今蔵に金の無心をしてきたのも、今蔵の引き出しから百圓を盗んだのも、期待はずれの息子から今まで育てあげた恩をお金で返してもらおう、という考えがあつたからなのかもしれない。今蔵の態度からは、自信の欠如と逡巡が見られる。「母親」に神聖さを求め、現実にある危機を打開する実際的な考えが、今蔵の中には存在し得なかつたからである。今蔵が「儒教的倫理観」を非常に強く持つ時代の子であつたから、子供であるという立場にあつて「孝」を求められると、決して反抗できない。しかし、母はすでに親子という関係からはみ出て、「息子」を冷酷ともいえる目線で観察し、ついには切り捨てたのである。

リベラルな考え方もつ人物と旧来の考えを持つ主人公という設定は、『浮雲』でも見受けられた。その思考から生じる両者間の溝によつて、主人公が追い詰められることになるのは当然なのである。

次に今蔵の妻について考えていく。今蔵の妻が、義母に対し強気な態度に移れない一因として「孝」が存在する。お政は旧来の価値観を持つ今蔵と同じ思考の持ち主である。

『だつてね母上おつかさんのことだから又大きな声をして必定きつとお怒鳴りどなになるから、近所へ聞えても外聞が悪いし、それに

ね、貴所^{あなた}が思ひ切たことを被仰^{おかしや}ると直ぐ私が恨まれますから。それでなくても私が氣に喰はんから一所に居たくても為^{しかた}方なしも別居して嫌な下宿屋までして居るんだって言ひふらしてお居でになるんですから。』

と、義母について夫に文句を言っているが、その内容は「対外部」の不安である。

また病弱で長男を産んだが、その子もまた弱い子であったため「妻」としての劣等感を持つていたと考えられる。古風な考え方をもつお政は、世間体を意識し自分の立場を常に気にせずにはいられない弱い立場にいたのである。

今藏の妻が、今藏の罪を知り子を負ぶつて自殺したというのも、旧式な価値観から逃れられず、今藏の妻として自分が夫に「罪を犯させてしまった」と思考する一人の女性の姿が浮かび上がるのである。またこのことは母の窃盗が契機となっているため、旧来の価値観が、今様な価値観に駆逐された、と考えることが出来るのだ。

注

- (1) 国木田独歩『病床録』(一九〇八年七月、新潮社、独歩の没後出版された、真山彬編)
- (2) 戸松泉「独歩と花袋の女性観」(『国文学 解釈と鑑賞』第47巻8号一九八二年七月)
- (3) 坂本浩『国木田独歩』(一九六九年六月) 有精堂
- (4) 勝本誠一郎「座談会 明治文学史」(一九六一年六月) 岩波書店
- (5) 小野末男「国木田独歩の『女性禽獣論』—母親の投影をめぐって—」(『解釈学会『解釈』三八八号一九八七年七月)
- (6) (5)と同じ。
- (7) 大串幸子「河霧」における運命論と自然観—独歩の女性観との関連について—(『日本近代文学会編集『日本近代文学』第21集)三省堂
- (8) 金美卿「『酒中日記』論」(『国文学 解釈と鑑賞』第56巻2号一九九一年二月)
- (9) 三田英彬「母」なるもののイメージ」(『近代文学』十所収、一九七七年十一月) 有斐閣。
- (10) 笹淵友一「明治大正文学の分析」(一九七〇年十一月) 明治書院
- (11) 滝藤満義「様々な帰郷—『帰去来』『河霧』『酒中日記』」(『国木田独歩論』所収、一九八六年五月) 塙書房

(12) 国木田独歩から田村江東に宛てた手紙。一八九四年十二月九日日付。

(13) 中島健蔵「国木田独歩論」『明治文学全集六六 国木田独歩集』所収、一九七四年八月、筑摩書店（初出は昭和二十四年の春陽堂文庫版三選集解説）

付記、国木田独歩の本文は『定本 国木田独歩全集』増訂版、（学研、一九七八年三月）による。